

製薬企業や薬局勤務

社会人でバンド結成

(1ページから続く)

昭和薬科大学の軽音楽部「七面鳥フォークソング部」の卒業生で結成されたFoot mark music。製薬企業で働くMRのK e iさん(ボーカル)、品質保証部門に所属するK a r aさん(ベース)、臨床開発モニターのD a nさん(ドラム)、薬局薬剤師のK a n iさん(ギター)と就職先も職種も異なる4人をつなげたのは、部活で1年に1回開催されるO B・O Gライブだ。大学で同学年のKaraさんとDanさんが後輩2人を誘ったのがきっかけだが、3学年以上離れており、部活の在籍期間は重ならない。正式にバンドを結成した2016年には全員が社会人になっていた。

社会人とバンド活動を両立していることもあり、全員が一緒になってスタジオに入って練習できるのは月1回程度。「大事なのは気持ちを途切れさせないこと」とメンバーは口を揃える。個人練習はもちろん、時間が合えば一部のメンバーだけで練習したり、作曲したものをL I N Eにアップロードして4人で共有するなど、スタジオ練習以外のときでも、それぞれバンドに関わることができる時間を分担して増や

す工夫をしている。他のインディーズバンドと比べて、ライブの頻度は決して多い方ではない。それでも「バンドとして成長することを楽しみ、観客の期待を常に越えたい」との気持ちはプロのバンドに引けをとらない。

こうしたチームワークの良さがFootmark musicの音楽性に生かされている。4人の音楽の趣味はそれぞれ異なるが、絶妙に融合して一つの音楽にしていくのが持ち味だ。サウンドの要は、K a n iさんが奏でるエレキギターのテレキャスターによる歪みを抑えて、丁寧に音作りを重ねたギターサウンド。D a nさんとK a r aさんのリズム隊がテクニカルな要素を入れつつも、しっかりと曲の土台を作り上げ、その上にK e iさんのストレートな歌詞とボーカルで全体的にポップな仕上がりととなっている。



Foot mark musicのメンバー。左からK a r aさん、K a n iさん、K e iさん、D a nさん

自分が抱えているエピソードと曲のイメージを照らし合わせている。医療の限界など、医薬に携わっている人が共通して抱える悩みを歌詞で共有したい。新たな一歩を踏み出せるようなメッセージを伝え、業界で働く後輩や薬学生たちの星になりたい」と目を輝かせる。

小学生からドラムを始めたD a nさんは、臨床開発モニターで、新卒で医薬品開発受託機関(C R O)に入社後、中途採用で製薬企業に転職した。乳癌を患っていた母親が抗癌剤による副作用で苦しんでいるのを見て、「安全な薬を開発したい」と薬学を志し、念願叶って現在は新しい抗癌剤の開発に携わっている。ドラムプレイも「薬学を考えるとときと同様、理論派」だ。他のパートとの調和を意識しながら、盛り上げる部分、抑える部分を考えて適宜、技巧を凝らし、バンドのパフォーマンスを支える。一方で、作曲のスタイルは「いいメロディーが浮かぶときは感情が動くとき」と感覚派の側面も見せる。

D a nさんと一緒にリズム隊としてバンドの土台を支えるベースのK a r aさんは、新卒で原薬を扱う商社を経て、中途採用で製薬企業に入社し、出荷判定やクオリティー・マネジメント・システム(Q

薬学の理論を演奏に応用

医療人の悩み 歌詞で共有したい

メンバーは医療と音楽に情熱を燃やす個性溢れた人たちばかりだ。「音楽は理屈8割、フィーリング2割」と話すK a n iさんは、勉強も音楽もコツコツとやるタイプと自認する。基礎的なコード進行やスケールなど、音楽の理論を本などで勉強した上でギターのフレーズを考えて作曲する。その原点となっているのが薬学の理論。「勉強も音楽も同じで、まずは土台を固めることが大事。全てフィーリングでギターを弾いてしまうと、同じようなフレーズし

か出てこない」という。土台を理解できているからこそ、変則的なギタープレイができるという。

K e iさんは、大学生活で培ったコミュニケーション能力に自信があったことと、医師への新薬の処方提案を通じて医療貢献ができることに魅力を感じ、製薬企業のMRとして活動している。声の大きさが自慢で「今に至るまで音量が上がり続けている」とボーカルとしての歌唱力は未だ成長途上にある。作詞も担当しており、「格好つけすぎず、等身大の

『ダメ。ゼッタイ。』だけで大丈夫!?

危険ドラッグ問題の表と裏

～学生に知ってほしいこれからの薬物乱用防止について～

〔著〕加藤 哲太・北垣 邦彦・嶋根 卓也
益山 光一・松田 勉・安田 一郎

薬物乱用問題について様々な立場や専門性を持つ著者達が、危険ドラッグを中心とした薬物乱用の問題点や正しい知識、防止教育のあり方についてやさしく解説。

「ダメ。ゼッタイ。」による一次予防にとどまらず、使用者・依存者の早期発見・介入、治療・リハビリなど二次・三次予防による再発防止の重要性について正しく理解できる

危険ドラッグ等の規制薬物だけでなく身近な医薬品の乱用や処方薬乱用において期待されるゲートキーパーとしての薬剤師の役割がわかる

学校薬剤師が小・中・高校生の薬物乱用防止教育の授業を行うために役立つ内容も掲載



薬事日報社

A5判/146頁/定価2,300円+税

薬事日報社 ご注文は、オンラインショップ(<http://yakuji-shop.jp/>)または、書籍注文FAX03-3866-8408まで。